

---

# Black or White

花鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Black or White

### 【Nコード】

N7963X

### 【作者名】

花鳥

### 【あらすじ】

ジャンル的にはファンタジー・・・ですが、何でもあります。銃とか、パソコンもあります。電気工学とか普通に・・・。完全に中2病なので好みもアレもないと思います。

## 設定（前書き）

まず、この世界・・・良く分かりません。簡単に言うなら、ファンタジー。悪く言うなら何でもあり。魔法を使える国王様がパソコンとか携帯とかばりばり使えちゃうし、いろんな意味でカオスです。びっくりです。それでも良ければ、軽く引き気味に数m離れてお読み下さい。

## 設定

世界観について

関東地方とよく似た地形をした異世界。4つの国があり、東西南北と統一している感じ。千葉と茨城、東京と神奈川位しかないみたいな感じでお願います。表現力がないので、4つのうち、一つの国は出せるとしても、他の所は確実に出せない気がするのでご了承下さい。しかし、出したい、小説の中でもう1つ位は……！

主人公達はその4つのうちの1つ、東京辺りの場所にいます。国名がリヨン国。王制で、花の都と呼ばれている。その為、観光が盛んで定期的に交換留学生などを送り、今のところは他国との国交は良好である。……今はね。

軍について

リヨン国には2つの軍があり、そのうちの1つは、一般的な感じの自ら志願して入隊して、城の警備や要人の護衛、街の治安維持など、所謂警察的な役割を持つ《軍》。

もう1つは、その《軍》の中から選び抜かれたエリート部隊でその名前を《騎士達の庭》と呼ばれている。《軍》とはあまり仲は良くない模様。

主な任務は、街に入ってくる魔物の討伐や、王の親族の護衛、他国との戦争になった際に王を守ったり、先陣を切ったり……と幅広く、武器の製造や薬品の研究なども請け負っている。そこは技術部と呼ばれて、万年機械大好き人間達の巣窟とかしている。

その中でも王から最も信頼されている者二人だけが《国王守護職》と言う《騎士達の庭》の最も最高位に就く事が出来る。《騎士達の庭》は実力があれば上に行けるが、風当たりは強い。そこで挫けて辞めてしまう人もいるとかいないとか……。

## 魔物について

この世界の魔物には主に二種類に分類される。1つは野生で街の外に出ればそこら中にいるようなもの。気性が荒く、度々街や村を襲う時がある。大体街にやって来るのはそれほど強くないもので、《騎士達の庭》の任務対象になる。しかし、森や山の奥などでは滅茶苦茶強い魔獣、ドラゴンやヒツポグリフなどがある可能性もある為、滅多な事では森や山に近付かないように呼びかけている。

二つ目は、魔術師や《騎士達の庭》などの人間が使役する召喚獣の類。ちよつとしたお店で買える召喚獣もいる。しかし、それはペット用で全く戦闘などでは役に立たない愛玩用。

しかし、魔術師や《騎士達の庭》の騎士達を使う召喚獣は、野生の魔物、野生の魔獣を飼い慣らしたりしたものを使う。しかし、それも飼い慣らすには相当な気合いと根性が必要。

召喚獣の普段は宝石のような光る石で、一定の魔力を加える事で具現化する事が出来る。小さな召喚獣だと普段から肩に乗つてたり、頭に乗つていたりして持ち歩く事が出来る。

## 魔法、属性について

魔法の属性が7つあり、火 水 雷 風 土 闇 光 です。基本的にこの世界の人間が扱えるのは、火 水 土 雷 の4種類です。と言うか、その4種類が一般的で、風 闇 光 はあまり知られていません。し、使える人が限られている感じです。光と闇の属性を持つ人間は、王族などしか発生せず、一般人の光と闇の属性が出てくるのは極めて稀。風属性はリヨン国のある巫女の一族にしか使えない。その巫女の一族でも風の属性の魔力を持つ子が生まれるのは本当に極稀……。

他にも属性に関係なく、物体浮遊魔法などは誰にも出来る魔法もあります。

## 学校について

小中高一貫のエレベーター式、そしてまさかの高校まで義務教育。正式名称は、リヨン国立小学校、リヨン国立中学校、リヨン国立高等学校。小中高全生徒合わせたら何人いるか分かりません……。高校で800人位？敷地面積は……。多分凄く広いです。魔法で拡張もありかもしれません。

他国の国立高校とも連携しながら、世界観についても言いましたが、交換留学生などでの交流もやっているようです。

主な行事は、体育祭や聖夜祭、文化祭等々……。体育祭はクラス対抗戦で優勝なんかしてしまうと、クラス全員に単位をプレゼント！みたいな感じの事をさらっとやっちゃうスーパー校です。

部活は至っては、普通な感じのモノが多い。剣道部とか、薙刀部とか弓道部、サッカー部……。芸術方面で行くと美術部だとか、陶芸部だとか。変わり種で召喚獣研究学会、魔術研究部だとかがあります。

授業は、数学、理科に国語、体育や社会等々の他に護身用の魔術や体術などがあります。

因みに、召喚獣の持ち込みは、大きくないものなら可です。

## 設定（後書き）

・・・こんな所かな？中学生時代の自分の空想を高校で引っ張り出してきたもののなので、凄く中2くさいですね！自分で改めて思いました！自分びつくりです！！  
まあ、頑張ってみます。

## 主人公達など（前書き）

キャラ紹介！！

多分、話数追う毎に増えていくと思います。



## 主人公達など

八神 蓮

7月25日 A型

苦労型の主人公、自分の好みを全体的に押し出して作ったキャラですね。中学時代に作ったキャラを今も愛着が沸きすぎて使ってる形です。その頃からこの小説の主軸とこの子を考えてました（完全に中2病だったんですね・・・今もですけど）。

髪は橙色、瞳は焦げ茶。高校2年で剣道部主将、もうすぐ部長かな？って感じです。甘党、料理などは普通にこなせる。

母親は病弱で彼が幼い時に亡くなっていて、今は双子の姉と破天荒過ぎる音信不通の父親がいる。因みに父親は嫌い…と言うか苦手。そんな父親は国の重鎮で、昔は城にも足を運んだ事がある。そこで会った少女に一目惚れ。未だに思い続けている。この物語で運命的な再会をするのは内緒だ。

武器は刀で二刀流。刀の名は白い刀、華月かげつと黒い刀、陽信ひしん（うわあ、完全に痛いよ・・・）だったんですが、親父が陽信を持っていったままだっか行っちゃったんで、今は華月と剣道部素振り用の木刀を代用。華月は12歳ぐらいの時に父親から譲り受けた、と言うか押しつけられた。

姓は母方の名前で、母親は国の行く末を占う巫女の血筋だったとか。

風雅 嵐

5月18日 O型

蓮の幼馴染みにして親友、性格は軽く！出来るだけ軽く！と言う設定でこの子も中学時代に作ったキャラです。まあ、その設定のままここまで来たんですが・・・。中学時代は関西弁のもっと軽すぎてウザイ系にする予定だったんですけどね…。どちらかというと、性

格的にもルックス的もこの子の方が主人公っぽいです。

髪、瞳ともに真っ黒。高校入る前にピアスの穴を開けて父親にボコボコにされたとかされなかったとか……。軽いが、決して軽薄ではない、軽いだけ。

蓮の双子の姉とお付き合い中、かなり惚れ込んで。部活はやらず、帰宅部。時々、スケッチをしたり、いろんな所で油を売っている。

武器は父親から譲り受けた槍、名を雷破<sup>らいは</sup>。雷を操る槍と父親が持っていた時から言われていたそうで、色々と言ひ付きの噂の多い槍しかし、魔力を加える事で雷を纏わせる事も可能らしいので、あらがちその噂も曰くも嘘ではないようだ。

志竜 霧也

10月10日 A型

蓮と嵐の父親の後輩にて、蓮達の学校の先輩にもあたる人です。

この人も早い段階からキャラが固まっていた人です。コンセプトは苦勞する秀才……です。性格的には蓮とかぶる部分もあるかもですが、ちゃんとキャラ分け出来るように頑張りたいです。

髪は金髪、瞳の色は限りなく黒に近い青。高校生時代は凄く頭がよく、要領もよい。その為、教師達からは面白くないと思われていた。まあ、嫌われていたと言う事ですね。

現在、軽くワーカーホリック気味。国王の遊び相手みたいなものになっっている、胃が痛み気味。可哀想な人。しかし、国王からの信頼は国王守護職に次いで二番手。仕事人間は伊達じゃないです。

武器は拳銃、ピストル型と思われる。二丁拳銃。しかし、銃に込める弾は鉛玉ではなく、魔法弾。魔法を自分で精製して、それを銃に込める感じ。時々、自分の魔力が足りない時は鉛玉を使う。

八神 朝霧 紅花 八神 黑晶 芙蓉 汪李 八神 風雅 紅花 紅花  
花 隆司 桔梗 俊 瞳 牡丹 時雨 葵 椿  
·  
·  
COMING  
SOON

## 主人公達など（後書き）

考えてみると、オリキャラの数が多い。これで大丈夫なのだろうか？

## 第一話（前書き）

自分で考えた初めてのオリジナル小説です。生暖かい目ぐらいで見てください。

## 第一話

・ピピピピピッ・

「…うゝん、眠い…」

まだ寝起きの、半覚醒状態の重い体を引きずりながら、ベッドの小脇にあるはずの目覚まし時計を探す。手探りで時計を探し当て、寝癖の酷い頭を掻く。まだ閉じそうな瞼を擦りながら、俺は時計を確認した。

「えゝと…」

ただいまの時刻、7時45分…。ん？ 7時、45分…？ そこ  
で完全に俺の目は覚めた。

「まずい…!!」

ベッドから飛び起き、素早く身支度を整え、嗚呼…飯を食べてる  
余裕は全くもってないだろう。空きっ腹を気合いでやり過ごして、  
急いで学校のバックを取り、玄関に走る。…そうそう、どんなに急  
いでも挨拶を忘れちゃいけないよな。

玄関にある、黒い額縁の写真に手を合わせる。

「…母さん」

今日も元気に、頑張ってきます。

「行つて来ます!」

早く行かないと、完全に遅刻する。でも本当…。

「くっそ！！ 全く間に合う気がしない！！」

学校まで走って20分、ホームルームは8時…うん、不可能かもしれない。そんな気がしてきた。

昨日、夜更かししたのがいけなかったのか…？ それとも腐れ縁…違うな。幼馴染み兼親友の話を夜更けまで付き合っていた事が原因なのか…。両方だろう。嗚呼…こんな事なら、あの馬鹿に付き合うんじゃなかった。

「よし、息の根止めよう。会ったらフルボッコだ」

「ぜえ…ぜえ…ギリギリセーフ…」

学校に着いた時は、ホームルームの始まるチャイムの鳴る2分前、本当にギリギリで間に合った。

「おはよう！ 蓮！！ 大丈夫か？ つか、遅刻ギリ…」

これが、俺の幼馴染み、風雅嵐。親同士が同じ職場で働いていて、小さな頃から一緒にいる時間が殆どだった。

因みに、俺の父さんとこいつの父さんは《騎士達の庭》と言う軍に所属している。その《騎士達の庭》の《国王守護職》と言う最高位に就いている。…まあ、うちの父さんが少し、いや…めちゃくちゃ難有りなんだけど、それはまあ良いか。今はそれどころじゃない。

「誰のせいだと思ってんだ！！俺は完全に朝型なんだよ！夜は寝かせやがれ！このバカ嵐っ！」

俺が、遅刻しそうになった原因はこいつだ。そんなこいつに思いっきり蹴りを食らわせてやった。

「ぶべらっ！？」

そつと自分の部活道具である竹刀袋を取り出し、その中であつた木刀を取り出す。

「嵐・・・覚悟は、良いな？」

満面の笑顔で倒れ込んだ嵐の目の前に立つ。当の本人は、顔面蒼白だ。

「えっ、ちよっ！？ なっ・・・木刀！？ 待って！ いきなり木刀は止めるって！！ 竹刀とかさ！！ ワンランク下の...」

「反・省・し・ろ」

「ギヤアアアア！！！！！」

その叫び声は、学校中に響き渡った。



## 第一話（後書き）

第一話！！書けた！そして懐かしい・・・。全く魔法出てきてないけど、凄くグダグダだけど・・・まあ、昔はこんなだったな。オリジナル、高校一年ぐらいかな書き始めたの・・・凄く凄く懐かしいです。つか、もっと文才がほしい。

## 第二話（前書き）

やっとの二話！書き起こすって大変ですね！

## 第二話

「あーくそお…身体中痛い」

「自業自得」

放課後、嵐の買い物に付き合うため、街の大きな商店街に来た。嵐は、朝方の俺が攻撃がまだ痛むのか、腕や頭を頻りに摩っている。授業でもあまり集中出来ていないようだった。・・・少しやり過ぎたかと反省するが、後悔はしてない。

「痛いです」

「分かてる、だから買い物に付き合ってやってんだろ」

「それは感謝してるけど！ お前強いの！ 俺の骨が折れそうだったんだから！！」

「はいはい、それは悪うござんした」

嵐の言葉を軽く受け流し、人のひしめく商店街を歩きながら、はと考える。こいつは何を買うつもりなんだろうか？

「なあ、何買うの？」

「良つくぞ、聞いてくれました！！」

聞くとうざいくらい満面の笑顔で胸を張った。狙ってるのか、天然なのか良く分からないが、心底うざい。いつもはそんなハイテンションじゃないだろう…。

「ブレスレット」

「ブレスレット？」

「牡丹にさ！もうすぐ帰ってくるだろ？」

「ああ・・・」

そうか、このハイテンションの理由が分かった。姉さんが帰ってくるのか。八神牡丹、俺の双子の姉。

この国では交換留学生というのを盛んに行っていて、姉さんもその一人として隣国…だったけな、に行ってもう半年ちよい。もうすぐ帰国らしい。

その姉さんといいつ嵐はまあ、付き合っている…。俺は別に構わないし、どちらかと言うと歓迎してる。それでテンションが上がってたなら…。

「まあ、それなら仕方がない、か」

「…何が仕方がないって？」

「何でもない」

「はあ…」

溜息を吐く。一人の女の子が生活するには広すぎるし、悪く言えば狭すぎる部屋。

「彼はまだ…私を覚えているでしょうか？どうしたら会えるでしょうか」

これは一種の賭けである。自分の可愛い娘と、その思い人を会わせる口実が必要なのだ。やはり、年頃の女の子、しかも一人娘をいつまでもこの城に閉じこめておくのは忍びないし、いつかは外交か何かで外に出なければならぬ。

しかしながら、まだ危険なのだ。思い人にボディーガードになっ

てもらおうと言つのも一つの手。

「…城から出られれば会えるでしょうか？」

「外はちよつと危険だし、兵の守りも薄くなるから…あつ、もうちよつと待つててね？ もう少ししたら考えるよ」

「お父様？それは一体どういう…」

「まだ秘密　じゃあ、ちよつと僕は仕事があるからね。部屋に戻るよ」

「分かりました」

悠々と娘の部屋を出て、少し思案する。これならどうにかなるかもしれない。

それはさっき入った情報。その情報によれば、商店街方面に野生か召喚獣かは分からないけど、大量な魔物の目撃情報が…賭けに出るには良い頃合いだろう。

「さてと、霧也？　準備は良いかな」

「分かりました。…国王陛下」

## 第二話（後書き）

改変じゃなくて、改悪です。自分で書いた小説に謝りたい。まあ、頑張ろう。出来るところまで突っ走ります。

## 第三話（前書き）

やっと三話・・・こんなモンでエエんでしょうか？

### 第三話

「さーで、どれにすっかな」

「……」

商店街の洒落たアクセサリーショップに、野郎二人で来るってどうなんだろう？ 周りを見渡さば、カップルで来ているのが多数……後は女子一人とか二人組。俺達完全に浮いている気がする。

「〜」

そんな事は全く気に留めていない親友は、鼻歌交じりに姉に渡すプレゼントを物色していた。彼女いない歴〃年の数の俺には関係ないか……。そう思えば、最初に恋らしい恋なんてものをしたのは、十数年前だったような気がする。マセガキと言われてしまえばそうなんだけど……。彼女は今元気だろうか？ 城にいた貴族の子だったような気がする。

父さんの仕事の関係上、よく嵐と共に連れて行ってもらっていた。彼女と会ったのも、それで三人で遊んだのもそれが始まりだ。小学校が始まってしまって、もうそれ以来。最後の日には会う約束もした。でも。

「まあ……俺には高根の花だったし、もう俺の事なんて忘れてるんだろっなあ」

貴族の娘さんなんて、一般市民の俺じゃ……全く手が届かない。凄く可愛い子だったから、もしかしたらもう婚約者とかがいるんだろう。その方が可能性がある。いない方がおかしいだろう。



「はあ…」

「なあ、何溜め息吐いてんの？」

溜息を吐いた俺に、買い物が終わったのか、綺麗にラッピングされた袋を片手ににやけながら嵐がやってくる。俺の吐いた溜息に嵐は首を傾げながら訊ねてきた。言う必要はないと自分で判断し、素っ気なく対応した。

「何でもない」

「そうか？なら、買い終わったから、ゲーセンなんかで遊んでからかえ…」

と嵐がにこやかに笑ったのも束の間だった。

ギシャアアアア！！

「！？」

そう遠くない距離から聞こえる魔物の咆哮。街は通常だと魔物除けの結界が張り巡らされていて、魔物の類は滅多に入ってくる事はない。が、時々、強力な結界を突き破って入ってくる魔物がいる事はある。

「…どうする」

「とりあえず、《ボランティア》は昔っからしてるんだし、大丈夫じゃね？　つか、聞く必要があるか？」

「そうだな…分かってるよな？嵐」

「へいへい…魔物が街に入ってくるなんて久々だからなあ。まあ、力まず行きますか」

その言葉を合図に、俺達は広場へと駆け出した

### 第三話（後書き）

もう少ししたら、キャラ紹介に一人二人追加すると思いませんか。よろしく願います。

## 第四話（前書き）

戦闘シーン？何それおいしいの？

## 第四話

「うわっ、多っ!!」

広場に来てみれば、二十数匹の魔物の群れ…いつもは一匹や二匹だったはずなのに。仕方がない…《ボランティア》と称して、魔物相手に修行をしようと言ったのは自分自身だ。

父さんから受けた昔の苦行に比べれば…どうって事はないはず。苦行の話は出来るだけはなしたくはない…一つ言える事は、あれは地獄だった。そして父さんが悪魔だった。その二言に尽きる。

絶対にもうやりたくない。やるくらいなら、いつそ消えて無くなる。…話が脱線しすぎた。それどころじゃない。

「さっさと軍の関係者が来る前に片付けて帰るぞ」

「そーだな…軍に捕まると簡単に帰れないからな。まあ、高校生で武器持つてる時点で不審だからなあ、俺達」

そう、一番問題なのは俺達なんだ。今、嵐が黒い槍を取り出し、俺もおもむろに刀袋に手をかける。俺が手に携えていた刀袋の中身は…竹刀、木刀の他。正真正銘父さんから無理矢理渡された白い刀…銘は華月かげつと言う。

明らかに高校生が持つものではないと自分でも思う。まあ、その経緯についてはまたいつか説明したい。一応、父さん絡みだと言う事だけは言っておこう。しかし、今はそれよりも目の前に広がっている光景を何とかしなくては。

- ギシャアアアア!! -

俺達の姿が目に入った魔物達が、一斉にこちらに突進してくる。

横に立っていた嵐が槍を片手に、体当たりをしてきた魔物に向かって蹴りを一発。…刃物持つてるんだからそっちを使えよとか言う深いところみは無しだ。嵐がトリッキーな戦い方をするのはいつもの話。

- シャアアア！ -

「蓮、そっち行っただけ！ 対処頼む！」

そんな事を思っている間に嵐の横をすり抜け、俺の真ん前から魔物が襲いかかってきた。…そんな大事な事は先に言えよな！ こういふ場合！！ 俺に死ねって言うてるようなもんだぞ！？

「っ！！」

上段に振りかぶり、迫ってきた魔物を斬る。あまり、斬った時の感触がない。さっと幻のように消え、光る石だけが地面に落ちる。…まさか。

「召喚獣か…？」

「蓮！？何か言った！！？」

「いや！独り言！！」

「なら良いけど！あつ、ほんとに早く片付けちまおうぜ！今日の晩飯、お袋特製肉じゃがって言ってたし！食いに来るだろ！」

背中合わせになった嵐に少し聞こえていたようだ。しかし…今は言う必要はない。しかし、肉じゃがは絶対に食べたい。

「行く！お邪魔します！！」

「よし、なら早く帰るぞ！！」

今はそんな事考えてる暇は無いな。色々、魔物に引っ掛かるところはあるけど…。

## 第四話（後書き）

四話目！・・・戦闘シーンってどうやって書けばいいんですか？誰か私にご教授お願いしますorz

## 第五話（前書き）

書き殴ってる状況ですよ（笑）



## 第五話

「ほらよっ！コイツで終わり！！」

「ギシヤアアア！！」

嵐が最後に残った一匹を倒し、広場には元の静けさが戻ってきた。安堵のせいか、ほうと一つ溜め息を吐く俺の肩に手を置いてにこやかに嵐は笑った。

「お疲れ」 やつと片付いたな！！」

「そうだな」

一段落して、とりあえず周りの様子を確認する。案の定…さつき考えていた事は的中していたらしく、大小問わずすっかり日が暮れた広場に傾いた陽の光に照らされて輝く石で埋め尽くされていた。

「召喚獣だったってわけか…こうして見ると綺麗だと思うけど、いい迷惑だよなあ」

「同感」

しかも召喚獣。誰かに召喚されたのは明らかだし、それにあの魔物の数、尋常ではなかった。…もしかして、単独犯じゃないって事か？

「・・・」

「蓮、どした？」

「いや、何でもない」

「そうか？ ならいいや。早く帰って飯食いたいなあ…腹減ってき

た」

「そうだなあ」

「つてあれ？ 俺達、こんなにゆっくり出来ないよな？ … 久々に嫌な予感がする。」

「嵐… 俺達、早く逃げた方がいいよな」

「あー」

「そう、もうすぐ軍の討伐隊がやってくる頃合いだろう。あの人達、どうも苦手なんだよなあ。色々聞かれると困る。もしかしたら、犯人扱いされる可能性だって否めない。」

「そういえば、広場にいた人達は勝手に避難してくれたみたいだな。」

「じゃっ！ 軍が来る前にさっさと帰…」

「嵐がそう言いかけた。しかし、帰る前に来てほしくないものが、先に到着してしまったようだ。」

「貴様ら！！ ここは今、立ち入り禁止区間だ！！ 何をしてる！」

「やっべ…」

「終わったな、俺達。」

「なんだよ！！ ちょっと、俺達マジでちょー善良な一般市民だつてのっ！！」

「俺と蓮は、討伐隊のオッサンに捕まった。必死に俺は弁解を試み

るが、頭に血が上ってるのか全く話を聞こうとしなかった。

「そんな物騒な物を持った高校生の話など信じられるか！」

弁解はそんな言葉で返される。

つか！今じゃ、当たり前前に高校生武器持ってるつーの！畜生、このオッサン頭固すぎ！

「それでもやってないって言ってんだろっ！」

必死に否定している俺の隣で、蓮ははあと溜め息を吐いた。

「・・・嵐、諦める。どう言っただってもう軽く容疑者扱いなんだし」  
「お前ほんとにこういう時、潔すぎだろ！」

ほんと、親父でも誰でも良いから、誰か助けてくれよ！！

## 第五話（後書き）

五話です。いきなり大丈夫なの？これ・・・って感じになっていますけど、大丈夫かな？自分でも不安です。主人公、諦め早い・・・。

## 第六話（前書き）

第六話まで来ました！！新主要キャラ登場です！

## 第六話

「さあ、一緒に来てもらおうか!」

「だから!」

「言い訳など聞かん!」

「うぐぐぐ...!」

濡れ衣着せられて、このまま引き下がれない。しかし、蓮は傍観に徹するらしい、もう呆れたような顔をしている。こうなったら徹底的に戦ってやると、意気込んだ直後。少し遠くの方から、見知った声が聞こえた。

「すみません。隊長殿：彼らは、我々《騎士達の庭》の関係者です。解放してあげてくださいませんか？」

「おっお前は...」

「霧也さん!?!」

声の主は、《騎士達の庭》の服を纏い、にこりと微笑んだ。彼の名は、志竜霧也さん。俺達の親父の後輩にあたり、俺や蓮の兄貴分としてよく遊んでくれていた。優しく強くと、色々出来る万能人間だ。・・・万能過ぎて困る事が多いらしいけど。

「お願いできますか？ 隊長殿」

「くっ...今日のところはこれで終いにいてやる!」

よく聞くような捨て台詞を吐きながら、軍のオッサンは広場から走り去っていった。他の軍の関係者もそれにつられたようにそそくさと去っていく。

「つたく！ 二度と捕まるかつての！」

「…はあ、助かりました。霧也さん、ありがとうございます」

俺の小言は完全に無視して、蓮は霧也さんに礼を言う。

「いやいや、礼を言うのは俺の方だよ。二人がいなかったらこの広場にいた人達がどうなってたか」

「いえ、俺達は何も…」

「そうそう、勝手に逃げてたし」

まあ、勝手に逃げてくれてたからこっちの方が助かった。避難してくれないと俺達だって暴れられなかったし。でも、霧也さんはそうは思っていないらしい。首を横に振る。

「何もしてないわけじゃないじゃないか。毎回こうやって助けてくれてるんだし…で、その流れでちよっと相談があるんだけど」

相談？ 霧也さんが俺達に相談…。嫌な予感がちよつろつとするんだけど、気のせいだと信じたい。蓮も多少顔が引きつっている。

「えっと…相談ですか？」

蓮の言葉に、霧也さんは満面の笑顔で頷いた。

「ああ。国王陛下が、毎回市民を守ってくれている君達に感謝状を出したいから、俺に連れてくるように頼んだんだよ。と言うわけで、城まで来てくれないか？」

「…え」

「はあ！？」

ちよつ、何この急展開！？



## 第六話（後書き）

これってどうなんでしょうか？あつ、霧也さんのキャラ設定も付け足しておきますね！！これは、どうなんでしょうかね？自分の文才の無さに涙が出てきそうですね・・・orz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7963x/>

---

Black or White

2011年11月23日18時47分発行